HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	田村慶子編著『マラッカ海峡：シンガポール、マレーシア、インドネシアの国境を行く』
Author(s)	伊豆, 芳人
Citation	境界研究, 9, 123-128
Issue Date	2019-03-29
DOI	https://doi.org/10.14943/jbr.9.123
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/83575
Type	departmental bulletin paper
File Information	9_08.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

[書評]

田村慶子編著『マラッカ海峡:シンガポール、マレーシア、インドネシアの国境を行く(ブックレット・ボーダーズ 5)』*

伊豆 芳人

このブックレットのはしがきに「これまでの号にならって、ボーダーツーリズムの手引きとしての役割も与えられている」という一文があることに励まされ、書評をお引き受けした。評者はボーダーツーリズム推進協議会に関わっているが、ボーダースタディーズの研究者ではなく、観光産業(以下ツーリズム)に身を置き、極めて現実的に言えば生活の糧を得てきた者であり、旅の目的地や旅のテーマなどを“売れるか?売れないか?”で判断をして来た。田村慶子氏編著によるこのブックレットの考察についてもそのようなツーリズム的な視点が入ることをご容赦いただきたい。

本書の構成は以下のとおりである。

はしがき (岩下明裕)
はじめに (田村慶子)
Ⅰ 地名から見る世界都市シンガポール(田村慶子)
Ⅱ マラッカ海峡:安全と平和を求めて(佐々木生治)
Ⅲ コーズウェイ:愛憎と共存のシンガポールとマレーシア(田村慶子)
Ⅳ 「昭南島」:戦争の記憶を見る(田村慶子)
Ⅴ ガラン島・レンパン島:島に残る大戦の痕跡(本田智津絵)
おわりに (岩下明裕)
【コラム】
移民が作ったローカルフード(田村慶子)
海峡を愛した日本人(佐々木生治)
逆風に翻弄される輸出基地バタム島(本田智津絵)
国立博物館特別展『戦争体験:一九四二年を記憶する』(齋藤梨津子)
不法出入国者(佐々木生治)
米朝会談の舞台セントーサ島は「死者の島」だった(田村慶子)

* 田村慶子編著『マラッカ海峡:シンガポール、マレーシア、インドネシアの国境を行く(ブックレット・ボーダーズ 5)』北海道大学出版会、2018年。

DOI : 10.14943/jbr.9.123

1.「はじめに」

本書は「マラッカ海峡に面する三つの地域の歴史と現在、国家を超えた協力、日本とのかかわり」についての理解を深めるための五つのエッセイと六編のコラムから構成されている。三つの地域とはマレーシアの南端に位置するジョホール州、シンガポール、インドネシアのリアウ諸島州である。前章として編著者田村慶子氏による「はじめに」があり、それは当該地域の地理・人口・歴史などの概要紹介、簡単な年表、編著者らが撮影した写真、対象地域の地図で構成されている。編著者は読者に対して「興味のある章やコラムのどこからでも自由に読んでいただければ」と記すが、ツーリズムに従事していた私には一気の読了を誘う魅力的な「はじめに」であった。ツーリズムの世界では特別なテーマで旅を企画する際に、参加者に関連する資料ブックをお渡しすることがある。その際に共通する重要なコンテンツは地図・年表・系図・関連写真であり、そのクオリティが資料ブックの価値を決め、ツアー内容のレベルさえも表すと言っても過言ではない。何よりも資料ブックを読むことは参加者にとって“旅前”（ツアーを申し込んでから実際に出発するまでの期間）の大きな楽しみなのである。特に地図が重要で、テーマによって当該地域の世界史地図や詳細な海流を示す地図を使うなどの工夫が必要となる。その意味で地図・年表・写真で構成された本書の「はじめに」は上質な資料ブックであり、編著者が企画し、説明者として同行したマラッカ海峡の旅（2018年12月催行、ビッグホリデー株式会社主催）でも重宝されたことは想像に難くない。

2. 地名から見る世界都市シンガポール

編著者よる第1章「地名から見る世界都市シンガポール」はシンガポール散策のハンドブックとしても楽しい。何よりシンガポールの地名の多様性がその歴史の多様性、人々の交流の多様性に起因することに驚かされる。マレー年代記にある「テマセク」（海の街）と呼ばれていた小さな島がシンガプーラ（獅子の街）と名付けられた物語から始まり、ブキッ・メラなどのマレー語の地名、16世紀のポルトガル進出時代に名付けられたペドラ・ブランカ島、イギリス植民地時代にイギリス人長官や総督など40人以上の名前が付いた英語の地名など、「地名を追うことでシンガポールと世界のつながり」が見える。シンガポールの多様性と秩序性は19世紀初頭にシンガポールに上陸したスタンフォード・トーマス・ラッフルズの指揮した偉業、民族グループ別の都市計画「ラッフルズタウン・プラン」に因るところが大きいが、本編にはそれぞれの民族居住区に残る地名、その由来もわかりやすく記述されている。

シンガポールは日本人旅行者にとって今は“シティリゾート”として人気が高く、2010年のマリーナベイサンズのオープンでそれに拍車がかかった。しかし、シンガポールに限らず、アジアの各都市の魅力は“雑踏”ではないか？ 元々都市観光の魅力は裏通り、旧市

街にあると言われるが、特にアジアの都市の雑踏には独特の“臭い”、“音”、“灯り”があり、エキゾチックである。アジアで最も美しい町と言われるシンガポールだが、本書を手に「地名」を訪ねて雑踏の街を歩いてみたい。

続くコラム「移民が作ったローカルフード」では編著者がフィールドワークで出会ったであろう多民族国家シンガポールの多様なローカルフードが紹介されていて、これまた大変楽しい。このコラムに料理毎の料金表を付ければ街歩きにますます便利なブックレットとなる。屋台はアジアの雑踏の象徴的な存在であり、アジアの多くの都市に存在し観光客にも人気を博しているが、それぞれに歴史があり、庶民の生活に密着してきた風俗だと気づかされる。

3. マラッカ海峡：安全と平和を求めて

第2章の担当はマラッカ海峡協議会の佐々木生治氏。同協会のホームページには“マラッカ・シンガポール海峡の守り人”としての同氏の29年にも及ぶ活躍、貢献に対して2018年夏、内閣総理大臣より「海洋立国推進功労者表彰」が授与されたとある。この章を読み終え自分には書評を行う資格があるだろうか、と評者は頭を垂れました。評者はマラッカ海峡協議会も佐々木生治氏を存じ上げなかったし、ここに書かれているのはツーリズムの視点で考察するなどという軽い内容ではないからだ。マラッカ海峡が「海賊と呼ばれた男」の日章丸、幕末の黒船ペリー艦隊、バルチック艦隊が通過した海峡であることは知られるが、海峡の安全運航を維持する事業に著者を始めとする日本人が長く従事してきた事実は重く、胸を打たれる。初めに紹介されているマラッカ海峡の「地理・航路の実態」は海峡の定義、マラッカ海峡の重要性などを知ることができ、評者のようなこの分野の門外漢には入門編として楽しい。中東からの輸入原油を運ぶタンカーはこの海峡を通過するので、この水路が閉ざされれば日本は真に「油断」。著者は、可航域、喫水線、潮高・干満差などの数字を交えわかりやすく難所マラッカ海峡を説明し、海峡に点在する航路標識の維持管理の重要性を説く。多くの日本人が知るべき活動である。また効率的な維持管理業務を阻むのは「国境線だ」と書き、海峡に位置する小さな島の領有権問題にも触れているが、著者の活動の根源にあるのはただただ「事故防止」。海賊、ゲリラとの遭遇など緊張が続く地道な活動が報告されている。ボーダーツーリズム的に紹介されているのはユーラシア大陸の最南端、マレー半島先端のピアイ岬。著者の書く通り「人は末端の場所に興味をもち、そこに出かけて確認したい衝動に駆られる」のだが、ボーダーツーリズム推進協議会では隅隅の地をゲートウェイとしても捉えようとしている。対馬は対馬海峡、稚内は宗谷海峡を越えて隣国と交流するゲートウェイだが、ピアイ岬はマラッカ海峡を往来する多くの船舶の灯標ともなるゲートウェイなのだろう。タンジュンピアイ・ジョホール国立公園内に位置するピアイ岬は、著者も憤慨する埋め立てが進んでいるが、ピアイ岬に限らずASEAN諸

国にとって恵まれた自然環境の保護と経済発展の両立は喫緊の課題であろう。ASEANとしてのルール作り、枠組み作りが急がれる。続くコラム「海峡を愛した日本人」は著者の大先輩であり同様にマラッカ海峡を愛し、人生を捧げた「キャプテン金子」こと金子昭治氏について愛情豊かに描かれている。著者のマラッカ海峡の安全運航維持の業績、金子氏の業績ともに多くの日本人が知るべき事実である。

4. コーズウェイ：愛憎と共存のシンガポールとマレーシア

第3章は編著者の示唆に富んだ報告である。ジョホールバルにはサッカーファンが良く知る、日本が初めてワールドカップへの出場を決めたラーキンスタジアムがある。0泊の応援ツアーは弾丸ツアーの先駆け。日本からシンガポールに到着した代表のチームカラーである青一色のサポーターたちは、コーズウェイ第一リンクを往復した。

以降一部のサッカーファンを除けば日本人観光客にとっての「聖地」にはなっていないが、「ドライブスルーでハンバーガーを受け取るような感覚で国境の手続きができるという経験」は日本人にとって貴重であろう。本章ではそんな全長約一キロのコーズウェイを挟んだ第二次世界大戦後のマレーシアとシンガポールの複雑な歴史、関係がわかりやすく解説されている。どこの地域にもある近いからこそ起こりえる愛憎の歴史だが、編著者は両国が互いに独立国家としてウィン・ウィン関係に入ったことを指摘する。また人口島、フォレスト・シティの開発がマレーシア経済に多大な貢献をする一方、新たな環境破壊、中国のさらなる影響力の行使も指摘する。中国の“飛び地”のようなフォレスト・シティは、華人の構成が約25%のマレーシアに何をもたらすのだろうか？

中国の影響はツーリズムの世界でも強大となっている。2018年、訪日旅行者数は初めて3千万人を超え、中国からの旅行者数は八百万人を超え、国別ではトップで訪日旅行者の30%近くを占める。一方、中国人の海外旅行者総数は一億人を超え、世界中の観光産業が中国人旅行者の動向に注目している。中国人海外旅行者総数は将来五億人を目指すという習近平コメントもあり、中国人観光客の増減に世界中の観光産業が一喜一憂する時代なのである。続くコラムではシンガポールからもフェリーで一時間の島、バタム島の現状が描かれる。シンガポールとの「一つの経済圏の構築」という取組に逆風が強まる中、インドネシア政府の対策などが時系列的に記述されている。

5.「昭南島」：戦争の記憶を見る

第4章はシンガポール人にとって辛く苦しい3年半であった1941年12月8日から1945年8月15日までの日本軍占領下のシンガポールについてである。

一般的に日本人には近代戦争において大艦巨砲主義の終焉を告げたマレー沖海戦、山下奉文がパーシバル司令官に無条件降伏を「イエスかノーか」迫った場面が知られるシンガポ

ール戦線だが、編著者はあくまでもシンガポール人の視点で、太平洋戦争を記述する。捕虜に対する強制労働(死者一万六千人)、華人大虐殺(犠牲者六千人とも四万人とも)など当時の日本軍の狂気に満ちた蛮行には改めて悄然とする。ツーリズムには戦争の跡地などを訪れるブラックツーリズム(ダークツーリズム)がある。世界各地に虐殺博物館があり、スタディ・ツーリズムの要素を加えれば広島原爆ドームの見学も含まれる。多くの観光客が訪れるが、忘れてならないのは現地の人々の心の傷は癒えていないということである。それはアジアのいくつかの国を訪れた評者も現地観光関係者や観光ガイドらの言葉の端端から感じ、肝に銘じたことでもある。日本からの観光客には笑顔で説明するガイドだが、史実をよく学んでいるからこそ忘れていない。編著者も「反日ではないシンガポール人」と題しながらも日本人として「日本軍政時代のシンガポールで何が起きたのかを記憶すべき」と書く。新元号となり平成の30年を挟んだ遠い過去になっても忘れてはならない、語り継がなくてはならない歴史であろう。続くコラムではシンガポール国立博物館で開催された「戦争体験：1942年を記憶する」特別展について触れている。この特別展に何人の日本人が訪れたのだろうか？ 訪日旅行者の急増のみに浮かれる日本のツーリズムの現状を危惧するのは評者だけではないであろう。

6. ガラン島・レンパン島：島に残る大戦の痕跡

最終章はシンガポールに関する著書も多いシンガポール在住の本田智津絵氏の執筆。第二次世界大戦後に10万人以上の旧日本軍が抑留され、ベトナム戦争後は約25万人ものベトナム難民が収容されたインドネシアのガラン島・レンパン島に残る二つの戦争の傷跡を克明に記している。抑留者の一人、山本立夫氏のまとめた当時の厳しい食料事情などが偲ばれる「恋飯島物語」からの抜粋文、著者の綿密な取材により一夜にして占領者から抑留者となった当時の日本兵の日々を知ることができる。また元ベトナム難民が収容されていたガラン島のキャンプ地が今では観光スポットになっていることも紹介し、戦争の記憶、痕跡をどのように残すかを問いかけ、「難民」という一つ言葉をとっても複雑な意味を持つことを教えてくれる。評者がフィリピン・ルソン島南部を訪れる戦没者慰霊の旅に参加したのは1993年夏、フィリピン沖で戦死したであろう母の兄の墓参りであった。マニラから南下し、数ヶ所の戦跡、日本人墓地を回ったバスの旅には当時11歳の娘も同行した。今でも貴重な経験を語り合う。戦争を知る日本人がいよいよ少なくなる中でいかにして戦争の愚かさを伝えていくか。改めて大きな課題を突き付けられる最終章である。

続くコラムは、再びマラッカ海峡協議会の佐々木生治氏がインドネシア・マレーシアとの国境をかつて不法に出入国していた旧知の地元住民との交流を記している。インドネシア人の不法就労者グループのボートが燃料切れで漂流し救助された事件も紹介されている。北朝鮮漁船の日本沿岸への漂着、ヨーロッパへ向かうシリア難民のボートの転覆な

ど、海の国境での悲劇は残念ながら絶えることがない。ツーリズムの出る幕ではないのかもしれない。ボーダーツーリズム推進協議会では国境・境界地域をゲートウェイとして捉えて国境線の向こうの国・地域との交流を旅行のテーマとして活動をしているが、物見遊山的ではなく、世界の国境線をめぐる悲劇、葛藤、愛憎を忘れずに、その上で未来志向的な展開を行うべきと気づかされたコラムである。

本書の最後のコラムとして編著者の「米朝会議の舞台セントーサ島は死者の島だった」では2018年6月12日に開催された史上初の米朝首脳会談の舞台が紹介されている。セントーサ島は言うまでもなく総合シティリゾート・シンガポールを代表する観光地で、日本からの観光客も多く訪れる。著者はシンガポールが「中立と安全の国」を世界的にアピールしてアジア太平洋の「サミット・シティ」を目指していると記す。

ツーリズムの世界にMICEという分野がある。Mは会議(Meeting)、Iは報奨・研修旅行(Incentive Travel)、Cは国際会議(Convention)、Eは展示会・見本市、イベント(Exhibition / Event)の頭文字だが、集客力があり、高収益、PR効果も大きく世界各国、都市が誘致に励んでいる。シンガポールは国際会議開催数で2011年から2013年は一位、世界のトップ三の常連で2016年は888件と世界三位。日本も五位(523件)だが世界No. 1は韓国(997件)であったことを記しておく(1)。著者はシンガポールはひとつの大国に大きく依存することを避け、複数の大国とバランスを取り付き合ってきたと書くが、それは「万国津梁」を標榜してきた琉球と同様の柔軟さではないだろうか。大国に囲まれ地政学的にも要所である小国が選ぶ賢い選択に違いない。

全体を通して、本書はアジア地域の旅行商品を企画する者のみならずツーリズムに従事する多くの者に是非読んで欲しい一冊である。

(1) 数字等は次を参照。「世界の国際会議開催状況」『数字が語る旅行業2018』日本旅行業協会広報室、2018年、25頁。